報告

アクティブ・ラーニングを支えるポートフォリオ評価
―「まなぶる▸ときわびとⅠ」における目標と指導と評価の一体化をめざして―

牛頭　哲宏[1)]　光成　研一郎[1)]　國崎　大恩[1)]　桐村　豪文[1)]

A Portfolio Assessment for Active Learning
－ An attempt to integrate the goals, instruction and assessment in 'Manaburu-Tokiwabito' －

Tetsuhiro GOZU[1)],　Kenichiro MITSUNARI[1)],
Taion KUNISAKI[1)], and Takafumi KIRIMURA[1)]

要　旨

平成 29 年度から始まった本学の基盤教育の中心科目に「まなぶる▸ときわびと」が設定された。「まなぶる▸ときわびと」は、学生が様々なプログラムに能動的に参加し、「仲間を作る力」「仲間と議論する力」「自らを見つめ直す力」などを身につけるアクティブ・ラーニングの科目である。この実践において、教師はグループにおける学習過程を観察し、介入と促進を行うファシリテータの役割を担った。教師の指導助言の質が学生の学びに重要な意味を持つ。教師が行う指導助言の指標になるのが、学びのプロセスを蓄積したポートフォリオ評価から得たデータである。

本稿では「まなぶる▸ときわびとⅠ」におけるポートフォリオ評価の実際を分析し、目標と指導と評価の一体化を図ることの意義と有効性について考察する。

キーワード：アクティブラーニング、ポートフォリオ評価、目標と指導と評価

SUMMARY

"Manaburu-Tokiwabito" was introduced as a core subject for Kobe Tokiwa University's fundamental curriculum in 2017. "Manaburu-Tokiwabito" is a course in which students aim to gain people skills, discussion skills, and the ability to analyze oneself through group work. Therefore, it is an active learning course that encourages students to participate in various programs through their own initiative.

The teacher observed the process of learning in students' group work and took a facilitator role,

1）教育学部こども教育学科

conducting intervention and assistance in this practice. The quality of instructor guidance and advice is of importance to student learning. The teacher used the data found from the portfolio assessment as the guideline.

This report analyzes the actual portfolio assessment used in “Manaburu-Tokiwabito I” and considers the effectiveness of the integration of its goals, instruction, and assessment.

Key words: active learning, portfolio assessment, goals, instruction and assessment

1　はじめに

1.1　アクティブ・ラーニングの要である言語活動

大学における授業改善と質の向上を図るときアクティブ・ラーニングは今や欠かせないキーワードである。アクティブ・ラーニングは、学生の能動的な参加によって行われる学修を意味し、様々な解釈があるが「課題の発見と解決に向けた主体的・協働的な学習・指導方法」（中教審答申 2014）[1] が小学校から大学までの一体的な改革における定義として定着している。

特に小学校では「個人で何かを調べたり考えたりする思考活動」「いろいろな人に話を聞きに行く取材活動」「調べたり考えたりしたことを工夫して発表する表現活動」という能動的な学びの形態は生活科や総合的な学習の時間を中心に取り入れられ、優れた実践例が多数紹介されている。中でも総合的な学習の時間 (アクティブ・ラーニング) は、いわゆる這い回る経験主義に陥らないよう、国語科において身に付けた言語能力が総合的な学習の時間を支え、同時に、総合的な学習の時間が国語科において育てた力を鍛える場であるという、相互補完の学びの場の確保を念頭に授業が組み立てられている。つまり、活動あって学び無しという状況ではなく、活動も学びもある時間にするために、話す・聞く、書く、読む[注1) 2)] といった多様な言語活動が要となるように実践されている。

アクティブ・ラーニングにおける豊かな学びの実現や、確かな学力の定着のためには、質の高い言語活動が不可欠である。例えば、テキストに書かれている文章を解釈し、言葉の意味を踏まえた上で、他者に分かりやすく表現するための工夫を繰り返すこと、つまり言語を用いた思考活動によって、新たな発見を得たり、既知の事柄を再認識したりすることは、豊かで確かな学びの姿であろう。さらに、グループ内での対話や、自分の考えを音声言語として表現する過程を互いがフォローし合うこと、つまり言語化のプロセスに他者が関わる学修の場が、豊かで確かな学びを支えることにもなる。大学における授業改善においても、他者との関わりの中で言語活動を充実させるという考え方を踏まえた実践が必要であると考える。

1.2　大学の授業のアクティブ・ラーニング化はどうすればよいか

大学におけるアクティブ・ラーニングの授業実践において用いられることの多いプレゼンテーションやディベート[注2) 3)] は、リサーチ活動において調べた内容を再構築して表現することによって、能動的な学びと多様な言語活動をバランス良く配置することができ効果的に学修成果を得ること可能であろう。しかし、ここで注意したいのはアクティブ・ラーニングには「型」があるわけではないということである。プレゼンテーションやディベートありきで

はなく、「主体的・能動的に学ぶ」「伝え合いを重視する」「メタ認知をさせる」という視点で、授業を工夫する必要がある。

そこで、学生の精神活動を活発に展開させるための「目標と指導と評価の一体化」について次の６つの要件を提案したい。

目標　ねらいを明確にした学修プログラム
①学生の学力を的確に把握し、身につけさせたい学力を明確に提示した授業
②学生が意欲的に取り組むことのできる問題解決型の授業
指導　学生が主体的に考える学修の場
③学生の思考を活性化する適切な指示と発問
④学生の「読む力、書く力、話す・聞く力」を育成するための言語活動の充実
評価　的確な評価による学力の定着
⑤目標と連動した評価活動を行い学力の定着を見取る
⑥評価結果を生かした的確な指導と支援

これらの中でも特に評価に着目した授業実践例を３章以降にて紹介していく。

2　ルーブリックの設定とポートフォリオ評価の概要

本学の基盤教育科目である「まなぶ▸ときわびとⅠ」では学生が既に身につけている知識や技能をさらに伸ばし、新たな学びを身に付けながら様々な場面においてそれらを使いこなしていけるように、原理や一般化に高めることをねらいとしている。したがって、複数の知識や技能を統合して使いこなすことを求める学修プログラムが複数用意されており、それぞれにパフォーマンス課題が設定されている。

「まなぶ▸ときわびとⅠ」のルーブリックは、担当教員の一員である國崎大恩先生が中心となって策定し、学修の到達度合いを示す数値と、数値に対応するパフォーマンスの特徴が記されている。

教員はこのルーブリックを用いて学生の実態を把握し、それと同時に授業の改善点についても考えることが可能となる。

この章では、毎回の授業後に行う、「ポートフォリオ振り返り」と、最終１５回目の授業に行う「凝縮ポートフォリオ評価」について紹介する

2.1　毎回行うポートフォリオ振り返り

「まなぶ▸ときわびとⅠ」では、毎時間の授業後に必ず「振り返りタイム」を設定し、「どんな点が上手くいったのか」「何が難しかったのか」「どのようにすればより満足のいく結果が得られるか」という三つの観点に沿って、学修過程の振り返りを通して自己評価を行った。

毎回の授業を振り返ることによって、「今日の授業で身につけた学力は何か」、次の授業において「どのような学力を身につけたいと望んでいるか」ということを学生自身が自覚し、同時に教員が学生の状況を把握するのである。学生にとっては自分が身につけている学力や身につけたい学力を自覚する場であり、教員にとっては、次の授業をどのようにコーディネートするかという指標を得る場となっている。

2.2　最終回に行う凝縮ポートフォリオ評価

最終１５回目の授業において、これまでの学修全体を振り返り、様々な資料やワークシート類を整理する評価活動を実施した。すべての学修場面で用いた資料を保存している「蓄積ポートフォリオ」から、ワークシートや資料などを抜きだし、自分にとって意味のある学修成果を整理する「凝縮ポートフォリオ評価」である。

この時も毎回の振り返りと同様、「どんな点が上手くいったのか」「何が難しかったのか」「どのようにすればより満足のいく結果が得られるか」という３つの観点に基づいて学修過程を振り返り自己評価を行った。

学修場面の説明や反省点などを記入した後、今度は他者とポートフォリオを交換し意見や感想を付箋紙に記入してもらう。つまり自己評価に加えて他者評価も行うのである。再び自分に返ってきたポートフォリオには、他者からのコメントが記入された付箋紙が貼り付けられている。そのようにして学修のエキスが詰まった「凝縮ポートフォリオ」ができあがる。以下、「凝縮ポートフォリオ評価」の手順を示す。

①学生は一人一人がファイルに学修活動全ての場面に用いた資料を保存している。全ての学修成果物を蓄積する蓄積ポートフォリオである。この時点では授業中のプリント類を保存しているだけのファイルであり、単なる記録である。

②蓄積ポートフォリオから役に立った資料やメモ類など、自分にとって意味のある学修成果を抜き出して整理する。この時、課題をどのように解決していったのか、学びの課題と成果を整理した。この時点から、単なる学修記録であるファイルから、個性的な一人一人の学びの軌跡を示す凝縮ポートフォ

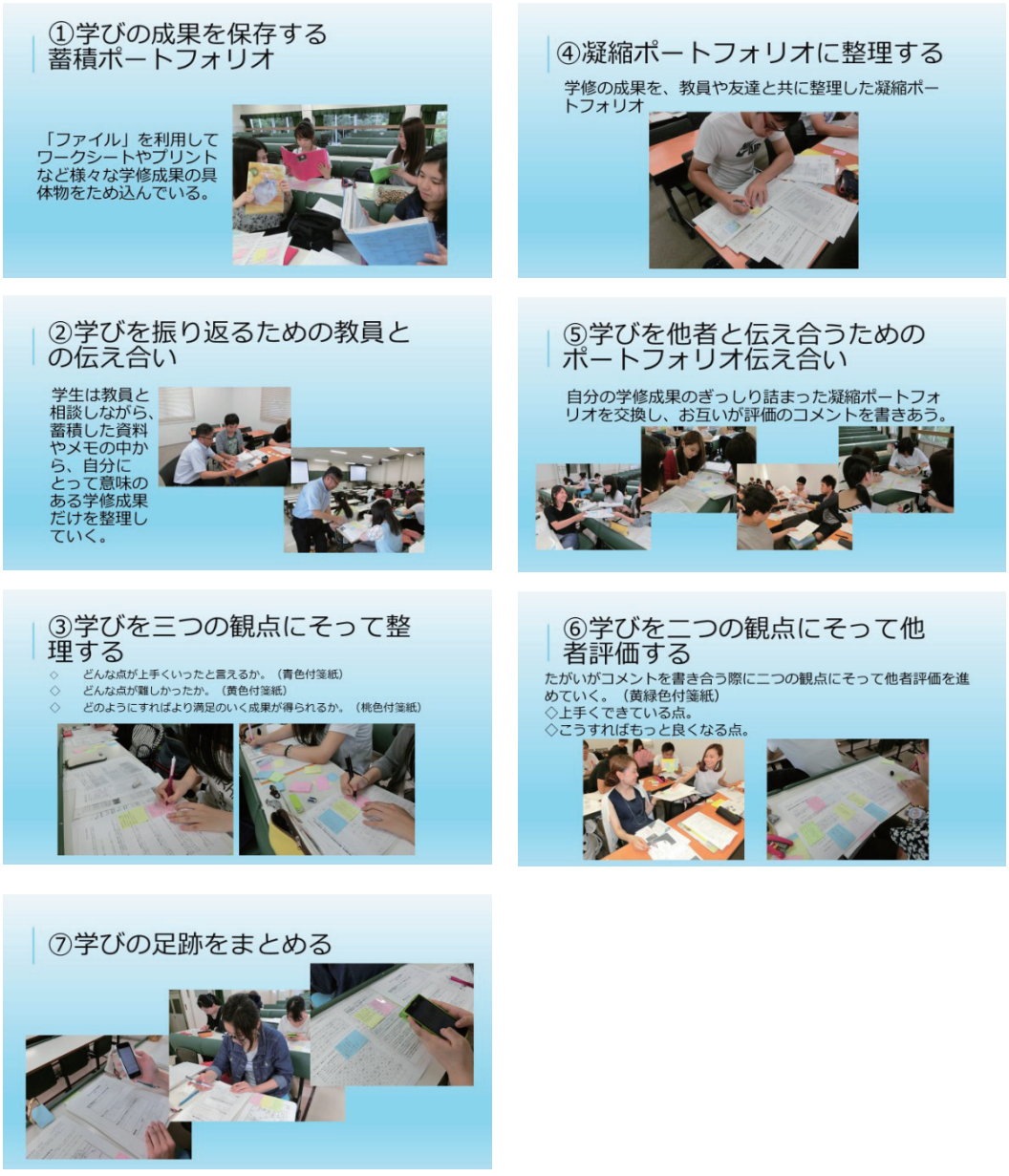


図１～図７　凝縮ポートフォリオの手順

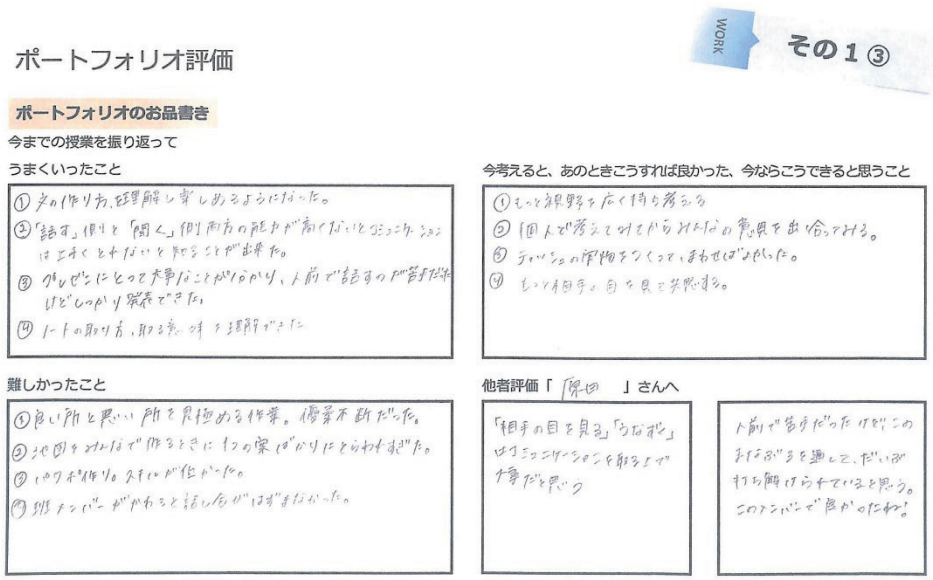


図8　ポートフォリオお品書き

リオになっていく。

③「どんな点が上手くいったと言えるか」「何が難しかったか」「どのようにすればより満足のいく結果が得られるか」の三つの観点に沿って、青色・黄色・桃色の三色の付箋紙に書き出しながら振り返っていく。例えば青色付箋紙には「資料と原稿を読むタイミングがよかった」「説得力のある書き方が分かった」等、学習過程において自分が上手くいったことを書き込み、黄色付箋紙には「インタビューの時緊張して上手く質問できなかった」など自分にとって難しかったことを記入する。桃色付箋紙には「発表時には事前に機材のチェックをしておかなければならない」など、同じ活動をもう一度する際にどのようにすればより満足のいく結果が得られるかという事柄を記入する。

④自分にとって意味のある学修成果を抜き出し整理したファイル。いわば学修のエキスが詰まった凝縮ポートフォリオが出来上がる。

⑤自己評価を付箋紙に記入した後、写真のようにグループ内他者とポートフォリオを交換し、他者から意見や感想を記入してもらう。つまり、他者評価を行うのである。

⑥自分に返ってきたポートフォリオには「何度も書き直したことによって分かりやすい表現になったね」「こんな全く新しい考え方もあるのかと感心しました」といったような他者からのコメントが付箋紙に記入され何枚も貼りつけられている。自己評価によって自分の学びの足跡を確認し、他者評価によって、自分では気づかなかった学修の意味が明らかになっていく。

⑦最終的にはポートフォリオのお品書きカードに、自己評価や他者評価のコメントを全て書き出し、学びの意味をもう一度振り返る。

3　授業実践

3.1　授業概要

本節では本学の基盤教育科目である「まなぶる▸ときわびとⅠ」の実践について具体例を示す。

対象：神戸常盤大学1年生全学部346名（担当教職員19名）

日時：平成29年4月～7月（前期）

科目：「まなぶる▸ときわびとⅠ」

3.2　1年生「まなぶる▸ときわびとⅠ」の実践例

グループワークにおける問題点とその解決

基盤教育の授業である「まなぶる▸ときわびとⅠ」

では、様々な学修プログラムが用意された。中でも「魅せる！大学の実像？虚像！？」と銘打った大学の魅力を伝えるコンテンツ作りの授業は、後に行った学生の授業評価において充実感・満足感において第一位のプログラムであった。大学の魅力を伝えるためにどのようなプレゼンテーションを行うのか、テーマに沿って情報を収集し、効果的なコンテンツを作成する過程において表現力のスキルを身に付けることをねらいとする。何をどのように表現すればより良い効果が得られるのか、グループ内他者との伝え合いにおいて表現（ことばの使い方）を振り返る力を獲得し、他者にわかりやすく伝えるための表現方法を発見していく。つまり、話す･聞く、書く、読むといった言語活動の充実と、学びを獲得する過程を可視化することを伴う能動的な学修である。

まなぶる▸ときわびとⅠはグループワークが主な活動であり、教員が指導する上で次に挙げる課題が当初から予想されていた。

○　授業時間内でしか指導することが出来ない。

○　学生からの質問が無い場合、途中経過を把握することが難しい。

○　グループ内における個人のがんばりを把握することが難しい。

これらの課題を解決するために授業観察と振り返りコメントの活用が有効であった。ポートフォリオに記される毎回の振り返りコメントを活用することによって、教員は授業中や授業後に指導すべき事柄を把握し、次回の授業における指導助言のプランを練ることができるようになった。

3.3　授業観察や振り返りコメントへの対応例

ある学生のポートフォリオに「少ない情報量でも沢山伝える方法を考えるにはどうすれば良いか」とのコメントがあった。この学生は、街頭にて配るポケットティッシュのデザインを考えているグループに所属しており、ポケットティッシュサイズの小さい広告スペースをどのように効果的に利用すれば大学の魅力をアピールできるのか悩んでいるようであった。教員は、授業中にこのグループを観察し、話し合い活動が低迷していることを把握しており、どのようなアドバイスを与えるべきか思案していた。

教員は次の時間に、限られたスペースの広告に関する様々な事例をタブレット端末で見せながら、インパクトのあるデザインについて考えることをアドバイスした。と同時に実際にデザインを描きながら考えることを提案し、デザイン画のプランを書く用紙を用意しておいた。このグループはこのアドバイスの後、具体的なデザインを描きながら活発な話し合い活動に入ることができた。授業後の振り返りコメントには「実際にティッシュのサンプルをつくれば良かった」「実物のサンプルをつくって皆で共有し回せばよかった」などの記載が多かった。抽象的な議論によって時間を空費したことの反省であるとともに、具体案を提示しながら意見交換を行ったことによって活発な学修活動になり、課題が解決できたことの現れと捉えて良いであろう。

授業観察とポートフォリオに記された学生のコメントから、教員は効果的な授業プランをコーディネートすることができたのである。また、一人の学生のコメントが、教員のアドバイスを引き出し、同じチームに属している他の学生の学修に貢献したことを賞揚し、ポートフォリオへの振り返りコメントの重要性について学生に気づきをもたらすこともできたのである。

本学のキャラクターである「ときワン」を考案した別グループは、キャラクターを用いた広告効果についてプレゼンテーションした。意欲的なグループであり話し合い活動も活発であったが、キャラクターの試作品制作やプレゼンテーションの練習時間が取れず困っているようであった。全学プレゼン大会の前日、グループのリーダーが教員に活動状況の報告をしてきた。グループ担当の教員は、時間短縮と効率化を図りながら完成度アップを目指すアドバイスと具体的な指示を行った。

以下、電子メールにて交わされた学生と教員との対話（一部抜粋）を記載する。



神戸常盤大学のキャラクター「ときワン」
常盤と犬の語呂をあわせ「ときワン」と命名した。
看護科のナースキャップ・医療検査学科の遠沈管・こども教育学科のスモック・口腔保健学科の歯ブラシをそれぞれデザインに取り入れている。

図９　学生が考えた本学のキャラクター「ときワン」

学生 Thursday, June 15, 2017 11:48 AM
今日試験があるため「ときワン」については何も手につけていない状態です。パワポや内容は少し変えるつもりですが、模造紙は何も動けていない状態です…。
ときワンはデジタル化できました。
模造紙にコピーできる方法はありますか？

教員 Thursday, June 15, 2017 12:21 PM
連絡ありがとう。
パワポのデータは完成次第添付して送ってください。
模造紙はどの様に使う予定ですか？
模造紙に印刷できなくはないですが、そこまで教員が手を貸していいものか。とりあえず画像データも送ってください。
明日は大型のプロジェクターとビデオカメラが設置される予定です。
パワポに画像を張り付けて、プロジェクターで映すこともできます。
明日までに集まって作業できる時間的な余裕がないのであれば、模造紙は諦めましょう。パワポに画像を張り付けて、プロジェクターで映す作戦で行きましょう。
時間短縮と効率化を図りながら完成度アップを目指して下さい。

学生 Thursday, June 15, 2017 15:51 PM
パワポは〇〇さんから提出されると思います。模造紙は難しいと思います…
ツイッターチームとインスタチームにときワンを宣伝してもらっているので、それの画像もパワポにつけて話すつもりです。

教員 Thursday, June 15, 2017 15:55 PM
なかなかのクォリティーですね。正直驚きました。素晴らしいプレゼンを期待してます。

その後学生達は少ない時間の中で、個々の役割分担を明確にしてプレゼン資料を完成させ、前日には作成を諦めていた模造紙による試作品も製作することができた。当日は「メンバー全員が時間を調整して発表練習をするので、先生も是非来て助言して欲しい」と連絡があった。教員の助言を生かしながら直前までリハーサルを何度も行い、意欲的且つ入念な準備を行ったこのグループは、結果的に全学プレゼンテーション大会で２位になった。授業観察によって途中経過を把握し、グループ内での話し合いに直接関わり、ポートフォリオや電子メールを使ったアドバイス等により、的確な指導を行うことができた。

3.4　アセスメントとファシリテートが連動することの重要性

上記の例のように、グループ活動を中心としたアクティブ・ラーニングでは、授業観察や学生とのコミュニケーションを通じて、学生の学修状況がどのような状態であるのかという探りを入れ、同時に、効果的な指導助言を与えることが重要である。つまり、アセスメントとファシリテートが連動することによって、個々の学生に応じた効果的な学びの場を提供することが可能となる。グループ活動においては学生の話を聞くことがアセスメントの中心となるが、評価はその対話の中で行われる。また、複数のグループを同時に指導する教員にとって、学生と接する時間は短いが、その時々の教員の指導助言が、学生の学びに直結し気づきと変化をもたらすものでなければならない。アクティブ・ラーニングにおいては、教員の評価眼や助言の質とタイミングなど、いわゆる「教員の指導力」が問われるのである。

3.5　自己評価と他者評価

最終 15 回目の授業において「凝縮ポートフォリオ評価」を行うが、その評価活動は他者との学びの分かち合いとしての学修活動としても展開した。15 回の授業を通じて自分が得た学力とは何か。まだ足

りない学力は何か。今後身につけたい学力は何か。ということを自覚させると同時に、振り返りによって、学んだことを原理や一般化へ高めることをねらいとしている。

自己評価のコメント表に示すように、学生のコメントには、この授業を通してできるようになったことや今後の課題について自分を客観的に見つめたコメントが並んでいる。毎回の授業後に振り返りを行ったことにより、自分の学力についてのメタ認知が進んでいる表れと捉えて良いであろう。

他者評価のコメントには「相手の目を見る、頷くはコミュニケーションを取る上で大事」といった

表1　ポートフォリオに記された自己評価のコメント（複数名）

表1　ポートフォリオに記された自己評価のコメント（複数名）	
協調性・協働力	●相手の意見も受け入れ、しっかりと耳を傾けることができた。自分の与えられた役割にも取り組みグループに貢献できた。 ●グループではしっかりと役割分担をし、自分の意見をしっかり話し合うことができた。また何度か自分の意見を認めてもらうことがあった。 ●班の中で別々の意見になっても自分とは反対の意見を否定せずその人の理由に耳を傾けた。
探求力	●自分の意見を考え出すことは難しかったが、よく考えることはできた。また、他の人の案も参考にして次に生かそうと考えた。 ●自分なりに考えたことを話すことはできたと考える。しかし、複数の案を出す為の広い視野は持てていなかった。 ●自分が思っていることを沢山書き出し調べたりしながら取り組めた。
表現力	●ディベートを行ったが意見理由共によく考えて伝えることができた。 ●今まで、人前で話すことが苦手だったが、まなぶるで表現の仕方を学んだので客観的に分かりやすく伝えることができたと思う。 ●他の意見も沢山聞き吸収することができた。 ●自分と異なる意見を否定せず自分にはなかった意見を発見することができ、さらになぜ自分はその考えを持っていなかったのかと考えることができた。
省察力	●レポートの書き方について良く学修し今後に生かすことができた。 ●授業の意味を理解し、振り返ることができたと思う。他の授業のレポートやプレゼンで生かすことができたと考える。 ●他の人や先生から学んだことを次に生かすなどして取り組んだ。
自己管理力	●計画的に課題に取り組み、授業にしっかと取り組めた。 ●遅刻や欠席をすることなく授業に取り組むことができた。 ●レポートやファイルは期日より前にゆとりを持って出せた。
デザイン力	●独創的なアイデアを考えることは困難であるため、他の人の意見を参考にこれからもっと考えたい。 ●今までは自分の意見はあまり言わないことが多かった。しかし、今では何かの案は出すことができるようになった。 ●「成人式に反対か賛成か」というテーマの時、私だけ反対の立場になったが他の人の意見に左右されず自分の意見をしっかりと主張できた。

表2　他者評価のコメント（複数名）

表2　他者評価のコメント（複数名）	
協調性・協働力	●人前は苦手と言ってたけどこのまなぶるを通じて打ち解けることができたね。このメンバーで良かった。 ●いつも自分の意見をしっかりと持っていて良かった。 ●相手が必要としていることを理解しようと努力することでコミュニケーションが取れましたね。
探求力	●何かを言わなければ始まらないし、まず動くことを学びましたね。それがいろんなことを知るきっかけになりました。
表現力	●「相手の目を見る、頷く」はコミュニケーションを取る上で大事だと思う。 ●三部構成で文が書けていて内容が分かりやすくまとめられていました。 ●「私は～」から文章を始めないだけでこんなにも印象が違うとは知らなかった。
省察力	●他の班の発表を良く聞いて反省し次に生かすことができていました。 ●次につながるように考えられていて自分自身の振り返りができていると思います。
自己管理力	●早めに取り組むことによって沢山インタビューができてよかったですね。
デザイン力	●人の意見を聞くことによって、新しい考えが出てくることが分かりましたね。

ノンバーバルコミュニケーションの重要性に気づいている。コミュニケーション能力を高めるには、自分の言語行動に関して客観的に考える機会が必要である。ポートフォリオ評価において振り返ることによって、よりよいコミュニケーションについて考えるきっかけが得られたと考えられる。また、「人の意見を聞くことによって…」「他の班の発表を良く聞いて反省…」「自分自身の振り返りができている…」など、他者との協働によって自分の学びを客観視する芽が育っている様子がうかがえる。このように、授業後に学生同士が自分の学びを分かち合う伝え合いの場を設定することにより、自分の言語行動や学びのあり方を客観的にとらえ、よりよい学びのあり方について深く考える学修が成立したと考えられる。

4　考察

まなぶる▸ときわびとの実践例として、グループワークでの教員の役割と、ポートフォリオ評価の一端を紹介した。グループワークでは、3.3 において紹介した例のように授業観察とポートフォリオ振り返りコメント等の活用によって、教員が行う指導助言が効果的に働き学修過程が充実したものとなった。また、ポートフォリオ評価においては、自己評価によって自分の学修の足跡を確認し、他者評価によって、自分では気づかなかった学修の意味が明らかになっていく様子が見て取れた。自己評価によって学びの意味を振り返り、他者からの評価によって、自分の学びの特色を自覚する。そして教師も評価を加える。「学びの足跡」を学生自身・教師が協力して創り上げていくことができたのではないだろうか。

5　今後の課題

まなぶる▸ときわびとの授業において学んだ、個々の知識やスキルが身についているかどうかについては、授業観察やレポート類、あるいはポートフォリオ等によって評価することができた。しかし、知識やスキルを他の多様な学びにおいて使いこなす上で必要となるような「原理や一般化」に関する理解を獲得しているかどうかを確かめるには、学生一人一人の今後の学びにも目を向け、追跡調査の必要があろう。他教科においても、自己を対象化してモニターし、「どう学んだか」「どのように思考し解決してきたか」といった「能力の行使の吟味」としての評価を行っていくことが重要である。

その意味では、今回使用したルーブリックとポートフォリオ評価は有効であり、より質の高い学びを創り出していくための自己評価眼を持った学生を育成するための場となったといえよう。

その一方で、ルーブリックの妥当性や信頼性を高めても、学生の学びを見極める教師の評価眼が十分でなければ、学修改善に生きる評価活動とはならない。学生の評価コメントを、授業の課題として捉え直すことによって、新たな授業の設計に資する指針を明確化することが今後の課題である。

今後、授業の改善を考えていく上で本学の様々な授業のルーブリックの再吟味と学びの可視化などを従来の評価方法と組み合わせて用いることが重要であると考える。

注

注1)　現行の「学習指導要領国語」においては小・中・高等学校全ての校種において国語の能力を身に付けることができるよう「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の３領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で指導領域を構成している。なお、平成30年度から小学校にて先行実施される新学習指導要領においては以下のように改訂されている。

「従前,「話すこと・聞くこと」,「書くこと」,「読むこと」の３領域及び〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成していた内容を,〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現

力等〕に構成し直した。
〔知識及び技能〕及び〔思考力，判断力，表現力等〕の構成は以下のとおりである。
〔知識及び技能〕
(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項
(2) 情報の扱い方に関する事項
(3) 我が国の言語文化に関する事項
〔思考力，判断力，表現力等〕
Ａ話すこと・聞くこと
Ｂ書くこと
Ｃ読むこと」

注2)　『国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例』の調査結果では、アクティブラーニングを組織的に行っている下記の大学の過半数がプレゼンテーションやディベートを用いて実践している（関西国際大学・同志社大学・広島経済大学・京都産業大学・関西大学・嘉悦大学・立教大学経営学部・九州工業大学・岡山大学・福岡工業大学）

参考文献

1) 中央教育審議会 .“新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）(中教審第177号)”文部科学省 .http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1354191.htm,（2017.10）.
2) 文部科学省 .“現行学習指導要領（本文、解説、資料等)”. 学習指導要領「生きる力」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm,（2017.10）.
3) 山地弘起 , 川越明日香 . 国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例 . 長崎大学大学教育機能開発センター紀要 . 2012,3, pp.67-85.